準体助詞「の」と文法化・構文化

青木博史（九州大学）

準体助詞「の」の発達・展開の様相について，「文法化」「構文化」の観点から記述する。

古典語準体句を承け，名詞句の主名詞の位置に発生した「の」は，述語の項として格助詞を伴って，あるいは述語として繋辞を伴って用いられた。「名詞句＋格助詞」「名詞句＋繋辞」の形であるが，これらは名詞句の脱範疇化とともに「述語句＋接続助詞」「述語句＋助動詞」へと再解釈され，「のに」「ので」（さらには「のを」「のが」），あるいは「のだ」「のだろう」といった形式が文法化（語彙化）する。まず，この変化の過程について示す。

次に，「のに」が表す「不満，違和感」の意味，「のだ」が表す「説明」の意味は，「名詞句＋助詞／繋辞」が表す構文的意味である。「連体形＋φ／もの／こと＋に／を／なり」といった，日本語史上に現れる形式を視野に収め，構文化の観点から分析する。

最後に，これらの分析をふまえ，「のだろう／だろう」，「のなら／なら」の構造と意味について，歴史的観点から説明を行う。